報告 585

学校における情報モラルに関する指導の充実をめざして（2 年次）

－保護者啓発を意識した情報モラル教育推進のための情報モラル校内研修モデルの構築－

高橋　雅（京都市総合教育センター研究課　研究員）

子どもたちに情報モラルを育成するためには，指導する教員の力量を高めることが重要であると考えている。しかし，学校は様々な教育課題と向き合っていることからも，教員にとって効率的に情報モラル教育の学びを進める必要がある。そこで，一度の研修で授業実践までを一体的に構想し，授業実践に結びつきやすくすること，また，情報モラル教育は家庭との連携が不可欠な要素を多く含むことから，家庭教育支援までの学びを含んだ情報モラル教育の校内研修会について研究を進めた。

第１章　学校と家庭で担う情報モラル教育

第１節　1年次研究実践　学校で担う「情報モラル校内研修会Ⅰ」

1年次の研究では，情報モラル教育に関する指導の充実を目指し，研修会での内容が教員自身の授業づくりと授業実践に，直接結びつくような校内研修会の進め方に取組んだ。

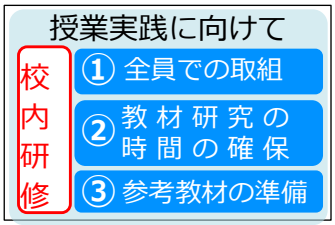

図1 情報モラル校内研修の要素

どの学年でも情報モラルの授業が実施できるよう，研修に必要な要素を図1にまとめた。研修会では，これらの要素を踏まえつつ，教材の体験と，情報モラルに関わる諸問題から，情報モラル教育の全体像を把握できる時間を設けたりして，情報モラル教育についての認識を深める活動をすることで，授業づくりに活かせるようにした。

事前に行った，「情報モラルの授業実践は得意かどうか」のアンケートでは「あてはまる13%」「あてはまらない87%」(n=39)の回答であった。授業実践後では「難しいと思っていた情報モラルの授業ではあったが，動画教材を上手く使えば，次回からは構えず授業ができそうだと感じた」「児童の発言から次の授業の方向性が見えた」「自ら授業を実践することで子どもたちの正確な実態がより把握できた」という記述から，今後の授業への意欲につながる様子も伺えた。情報モラル校内研修会Ⅰの内容が授業実践に活かされたと考えられた。

第２節　情報モラル教育と家庭教育支援

第2期教育振興基本計画（平成25年6月14日閣議決定）では，基本施策に「豊かなつながりの中での家庭教育支援の充実」が掲げられ，次期学習指導要領改訂のための論点整理では「社会に開かれた教育課程」の実現を共通の理念とし議論が進められた。これは，学校が核となって地域・保護者を教育課程につなげるというマネジメント力の必要性を示している。しかし，学校と保護者をつなぐ上で一番身近である学級懇談会の参加率は，高くない現状がある。また，教員にとっても，授業研究と比べると，懇談会の在り方を具体的に協議するような機会が少ない。学校全体で，懇談会の取り組み方を今一度捉えていくことは，家庭教育支援を進めていく上で大きな意義があると考えている。そこで，情報モラル教育の充実に向け懇談会を中心とした家庭教育支援の在り方を考えていきたい。

第２章　家庭教育支援につなぐ校内研修会の在り方

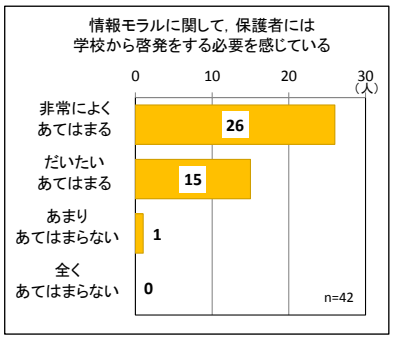

図2 保護者啓発の必要性について

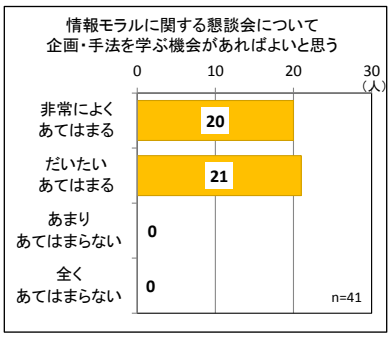

図3 懇談会の企画・手法を学ぶ機会について

研究協力校を対象に行ったアンケート結果(図2,図3)からは，情報モラルに関して保護者啓発の必要性を感じ，その懇談会の具体について学ぶ機会が欲しいと感じていることがわかる。そこで，家庭教育支援を実践していくための具体を研修に組み込むことで，保護者啓発に向けた具体的な実践につながると考えた。

こうしたことを踏まえ，学校教育を軸に家庭教

育支援へつなぐ情報モラル校内研修会Ⅱ(図4)を構想した。

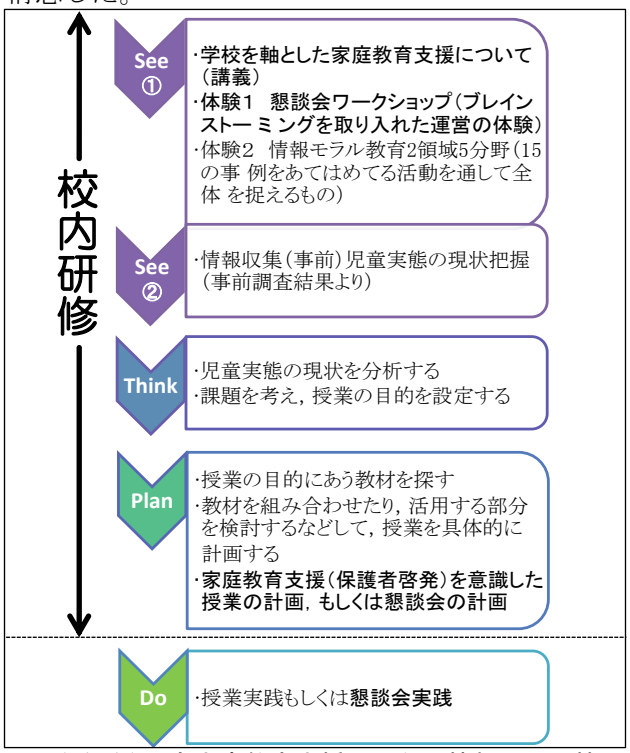

図4（2年次）研究家庭教育支援につなぐ情報モラル校内研修会Ⅱの全体像

第３章　2年次研究実践から

第１節　家庭教育支援につなぐ「情報モラル校内研修会Ⅱ」

「情報モラル校内研修会研修会Ⅱ」では，家庭教育支援を考えるための学びと懇談会を想定したワークショップを体験することから，家庭教育支援について学校全体で一考する機会とした。研修会は校内の教職員の協働的な活動で進めていくものである。STPDのマネジメントサイクルを活かし，児童実態に沿った授業計画をするまでを行った。この研修会で生み出された授業には，保護者参加型を意識したものが多くあった。

第２節　魅力ある懇談会づくりのために

研究協力校A校では，保護者啓発を意識した授業参観を実施後，家庭教育支援についての学びをより深めたい思いが生まれ，懇談会づくりに特化した研修会を実践するに至った。

この研修会では，懇談会に参加する保護者にとって魅力ある内容になるように，三つのワークショップを体験し，保護者側と学校側(進行者)両者の視点から考えた。図5は，各ワークショップを評価するシートの一部である。これらの体験を元に，各先生方の工夫が加えられた懇談会が実施

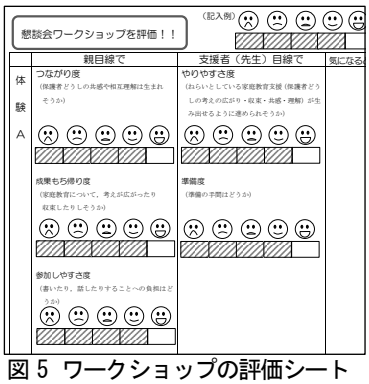

図５　ワークショップの評価シート

された。また，懇談会ではお互いに意見を出しやすい雰囲気があり，保護者の感想からも「このような機会を用意してもらえてありがたかった」とあり，情報モラル教育について考える機会となったことや，教員の聞き取りからは懇談会の実践に充実感をもたれた様子が伺えた。

第４章　実践研究の成果と今後の課題から

B校5年生の先生方は，情報モラル校内研修会Ⅱで，1回の授業づくりを終わるのではなく総合的な学習の時間のカリキュラムで取り組みたいと考えられた。そこで，児童実態の調査結果から気になる情報を分析し，8時間の情報モラルを含んだ学習を行うに至った。目の前の子どもたちに必要だという気持ちから授業を実践されたことは，単元のまとめの学習で，子どもたちがこれまでの学習内容を自分の言葉で活き活きと表現し，互いに思考を深める良い学びへと結びついた。教員の主体的な授業実践の良さがみられ，情報モラル教育の充実を目指すために必要な要素だと考えられた。

二年間の研究から，子どもたちが情報モラルを身に付けるために大切なことは，授業を通して思考し，どのように情報を扱っていくのか自分自身で考えながら活用できるようにすることだと考えた。そして，この教育は学校だけで完結できる課題ではないことから，学校を軸に保護者へ返す，つまり保護者啓発を推進することが情報モラル教育の充実に向かうと考えるに至った。

特に，保護者啓発を推進するためには，情報モラル教育を理解してもらうための授業や懇談会の実践を，次回への参加意欲にもつながる魅力ある取組にしていくことが必要だと考える。こういった考えを一人一人の教員がもって情報モラル教育に携わることも大切だと考える。

また，社会に開かれた教育課程の実現に向けても，子どもたちをとりまく人々，つまり保護者や地域との関わりについて捉えなおし整理する機会を，教員にきちんと保障することが必要である。このことは，家庭教育支援の充実に向かうと共に，学校を核とした人のつながりを目指す教育コミュニティの構築へと結びつき，情報モラル教育のさらなる充実につながると考える。